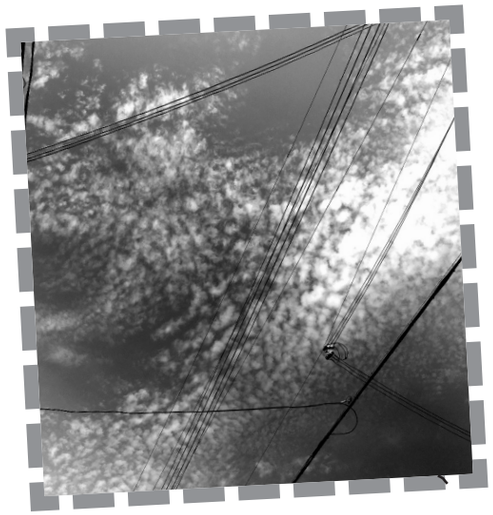
月　刊

Mélange

Vol.117



2016.10.30

詩と評論

月刊「Mélange」
Vol.117　2016.10.30
「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」117号　目次

詩＆俳句

ソフトクリーム ……富　哲世　03
帰還詠 (俳句) ……岩脇リーベル豊美　04
こんばんは物怪ですが (俳句) ……高橋雅城　05
わら人間／どろんどろん ……中嶋康雄　06
ご近所 ……野口裕　07
眠り続ける夢を見る ……黒田ナオ　10
憑かれたわ …… 北岡武司　11
みつまた ……大橋愛由等　12
シングルメリー ……中堂けいこ　13
ごちゃくごちゃく……高谷和幸　14
夏に出あう ……福田知子　15

第19回ロルカ詩祭・書き下ろし朗読詩 ①

思わぬ恋のガセーラ…… F・G・ロルカ　鼓直訳　08
砂の果てた日……北原千代　09

連載エッセイ＆詩評

神戸詞あしび106「吟行ならぬ即興詩を課した詩人の旅」……大橋愛由等　16

編集部だより★37／病気がちや体調不良のひともいたりして、このところ「Mélange」例会に参加する人数が減っている。とくに先月(9月)の合評会は私を含めて二人しかおらず合評会は成立しなかった。詩についての懇話会のようになってしまった(第二部の読書会では合計五人に増えたが)。参加人数によってページ数が変動するこの「月刊めらんじゅ」も今号はなんとか16ページを確保したが、12ページといった月もしばらく続いている。110回以上も毎月つづいている詩の会なので消長はあるかと思い、いまは構成メンバーの過渡期なのかもしれないと自分には言い聞かせているが、現代詩の担い手の高齢化の影響かもしれない。例会の事務局を担当している私にとってやはり詩の会は活気がある方がいい。なんとか会が安定するよう一回ごとの内容を濃くしていきたい。／10月の読書会は、ガルシア・ロルカの故地を中心にスペイン紀行を果たした福田知子さんにその感想を語ってもらう内容。(大橋記)

◆ソフトクリーム

富　哲世

王様は昔ながらのコーンカップのソフトクリーム
　が大好物だった
ローンを支払いながら
時には車輪を転がしながら
ほんとうはバニラが好きだったのだが
そしてほんとうは踊るように
跳ねながらやって来る鍔の広い羽根帽子の長靴ね
　この銃士に
それを運んで来てもらいたかったのではあるが
ゼブラ模様に塗り分けられた玉座に腰掛け
(多々裏切りもあることゆえ)
臨終の時も
慎み深くソフトクリームでさえあれば種類やミル
　クの質の良し悪しなどにもさほどこだわりはし
　なかった
我慢できた
屋根を突き抜け
天井裏と天井を突き抜け
「貧しい詩人」の広場に広げる傘と銀の盆を突き抜け
ラムプを突き抜け眼を突き抜け眼窩を突き抜け坑
　道を突き抜け
もし眼薬が降ってきたとすれば
そのひと雫さえも逃すまいと
からのメスシリンダーをささげ持って右往左往し
　ながら
彼らはいっせいにてんでばらばらに方向を変える
もし新巻鮭の半島に寄りそう切れ目の水平線をな
　ぞり
紙芝居のように左(下手)から右(上手)へと汽船がい
　くとすれば
庭に面した窓框にいきなり巨きな顔があらわれワ
　インレッドの唇を満面に花咲かせて
うらめしや、と言う
予後の見通しはいかがですか、
また今夜お邪魔しますと言って両手で顔をうずめ
　ようとするものだから
求めるのでも積み上げるのでもなくひとごとのよ
　うに無関心の首と舌をなるたけ伸ばして平気な
　ふりをして(たとえばその首を大腸でぐるぐる巻
　きして)
こちらもばあと言ってみる
そこで窓を挟んでばあばあばあの交換となる
偽装の城を徘徊する
何事にも無関心のひと瘤駱駝がそれでも耳を傾け
　ながら
あらゆる床や壁を叩いてまわり
ヒヒンと鳴く
しばらくのあいだ、わたしは興奮が息を詰め
太陽の黴がからだ中のあらゆる部分から細い腕を
　生やすように
銃口をこちらに向けて火の色に赤ん坊を孕んで膨
　らんで来るのを感じた
赤ん坊の体内には熱いガラス玉が仕込まれていた
どんな引き潮が森のみぎわからわたしの鹿を拐っ
　ていくのかは知らないが
たとえ明日という囁きの幽霊が永遠に手の届かな
　いものであるとして
ほんとうならとっくにたどり着いているはずだ
そしていまごろは羊歯の襤褸を纏ってありきたり
　のつまらない移ろいの日々を宝物みたいにまた
　取り逃がすために
じっとカードの唐草模様を見つめているか
いまに転がるおもちゃの梯子車に見入っているは
　ずだった血の退く羽織半纏を置き忘れて
まさかこんなにどこまでも遠くくだりつづけて
いつの間にかケーキ屋や街路樹といった当たり前
　の街並みの景色全体がすき間を争うように歪ん
　で肩を寄せ合い窮屈に犇めきあってきて
見慣れぬ迷い路に溢れ出すように謎めいて見えて
　くるなんて
そして通りに面した鉢植えのかげのてーぶるでト
　ーストでもかじりながら、いつものコーヒーで
　も啜りながら
サングラスを外してふと思う
ここに鍵は三つある
ひとつは山羊髭の
ひとつはマリアさまの
そしてもうひとつは…
これはなんのゲームだろう
見慣れぬと思っているこの迷いの場所こそ
見えない氷山が迫っている繰り返しやってくるい
　つもの雑沓の悪意に満ちた醒めた景色で
わたしは消え去りながら夢見ている一介の招かれ
　ざる客のひとりなのではあるまいかと
どこからかにおうように
母ちゃん母ちゃんと呟く声が聞こえている
木目に模した無数の眼が天井に開いて
何もかもが必要であるのと同じくらい
必要なものは何も無い
とんとんと指でてーぶるを鳴らしながら
拝むもの通りすぎていくもの立ち止まるもの佇む
　ものひとつひとつに
小さなブックマークを施しながら
他界とわたしが覆面みたく
印でいっぱいにおおわれていくまで

◆帰還詠

岩脇リーベル豊美

蛤の城砲声聞こゆ火点し頃
海へ誘ふと見たくないとUターン海人
菜花の里肋骨折れてベゴニア開く
苺栗無花果スイーツ警官教師詩人の再会
能管とチェロ叢林の宵闇フェードアウト

秋刀魚食み山女眠る水は澄む
泳ぎたし水族館ゴリラの談話室
原発沖縄難民は無防備頭を撫でまはす
愛猫忌に蝋燭供ゑて君には随時送る
東京ミーティング株主優待券風の宿
金木犀嗅がず仕舞いの秋雨帰還
今も大食と信じきる母の芋煮鍋三杯
病母の襖バックに告別式用写真撮る
病母の渡す餞別壱萬円札畢竟もらふ
アブダビアブドゥバ機内食ハラルの朝粥
女のゐぬ間に桜古木伐り倒す落葉前

◆こんばんは物怪ですが

高橋雅城

セーラー服と機関銃　二十句

今日からは他人夜ふけの月昇る
昨日まで他人今日には蚊帳を吊る
蚊帳吊るや昨日あたりが妻の恋
恋人に人の掟や誘蛾灯
願ひたる糸ゆらゆらと友帰る
海の日のセーラー服と機関銃

こんばんは物怪ですが瓜盗む
瓜売りでござい明日へと夢心地
狂句詠む始め西瓜が大きすぎ
勘弁だわらび餅には妻笑う
蟹を食う人もあるのだアルカイダ
唐茄子を売る人ありて産気づく
誘蛾灯もらい泣きだよ今日の恋
みどりさんラブミーテンダーまでの縁
おにゆりの色いくつかの夢こえて
ゆり咲きぬ私といたしましてはね
演説の口調いいなづけのキス
朝焼けてアンジェラ・アキがべらんめい
球のなつ橋本環奈てごわいぞ
手心をくわえ真夏の掟かな

◆わら人間

中嶋　康雄

たくさんのわら人間が
吹き飛ばされてしまう
いなくなってしまえば
ほっとして
一秒で忘れてしまう
横断歩道の隙間からときどき
いなくなったはずのものが
顔でものぞかせてしまうと
ものすごく迷惑がられるから
暗くなるまで
うんちを我慢する
我慢しきれなくなって
駆け込もうとすれば
もっと前に吹き飛ばされた
もっと我慢したわら人間が
もっともっとほつれながら
うんちを出して消えかけている
消えるのがいやなら
いったいどうすればいいのだろう
横断歩道を渡るただのざわめきに
顔を踏まれながら
咳をしながら
クロールのまねごとをするのが
横断歩道の隙間の流行だ
流行はただの流行ではない
取り残されるともうあとはない
元気はただの幻で
とらえどころのないライセンスだ
ライセンス契約は横断歩道の
何番目に落ちているのか
白いところに落ちているのか
黒いところに落ちているのか
わら人間のずるがしこさが競われているが
ずるがしこさになんの価値もない

◆どろんどろん

中嶋　康雄

どろんどろんが破裂した
まるでビニール袋みたいにあっけなかった
中にいた妖怪どもが放り出されて
あたりをきょろきょろ見回していた
アスファルトに横たわる残骸を
拾って頭に被ってみたり
口の中に入れてみたりした
どろんどろんの中は暖かかった
牡丹やハイビスカスの花は咲いていなくても
百日紅くらいは咲いていた
「ここはさみしいねえ」
おばあさんの妖怪が言った
妖怪は働き始めた
人工頭脳とロボットに働き口は奪われ続け
ニッチは狭くなるばかり
「どろんどろんの頃はよかった・・・」
ユウレイクラゲをあてにビールを飲んだ
空を見上げればドローンが飛んでいた
どろんどろんの一種かと
「中に入れてよ」
頼んでみるが空耳が空耳を呼ぶだけだった
帰るところがまるでなかった
つまらない顔をして帰る人の肩にも乗った
「あんたには帰るところがあるだけいいねえ」
聞こえないふり見えないふりをされてしまった
蛙が弟子にしてくれと言った
「いまどき妖怪の弟子になんてなるもんじゃない
　よ」
と断ったが月謝代わりに
ハエを何匹かくれたので弟子にした
教わった妖術が役にたたなかったから
ハエに蛆虫を付けて返せと言ってきた
「ハエはもう手元にいないから返せない」
「ハエを返せないのなら代わりに金をよこせ」
蛙がゲロゲロしつこいので
「ないものはない」と言って無視した
蛙はいつまでもゲロゲロ言ってきた
会社に通勤するためにバスを待った
バスの運転手は蛙だった
「ハエをちゃんと返すまでは乗せない」
バスは走り去った
少し遅刻をしてしまった
人工知能の部長が
おまえはくびだと言った
「日割り分は月末に振り込む」
ところで会社はいったいなんの会社だったのだろう
ミミズの元同僚にきいてみた
元同僚はない首をかしげるばかりだった
日割り分は月末になっても振り込まれなかった
道端に弁護士が落ちていたので依頼した
いつまでたっても未払い給与は手に入ることはな
　かった
請求された弁護士費用は月賦で払った
「妖怪だからバカにしているのか」
ルームシェアしていたのっぺらぼうが怒った
「どろんどろんの中に帰りたいなあ」
「帰れないなあ」
天井部分の妖怪と床部分の妖怪が
真ん中あたりで泣いていた

◆ご近所

野口裕

赤信号の角で
いつも右折のアオスジアゲハと
直進しか知らないスケートボード

恋愛中の家族はいないのに
更地の脇で
なで肩を見せるバルコニー

隣星は4光年先
お巡りさんが一杯住む官舎に
おしめが並ぶ

トランプの上下ひっくり返して
二度くり返すような
目のまわる話

◆思わぬ恋のガセーラ

フェデリコ・ガルシア・ロルカ
鼓直訳

気付いた者はいなかった
きみの下腹でにおう　黒い木蓮の香りに
きみが苛んでいることに気付いた者はなかった
恋のハチスズメを口にくわえて

ペルシアの馬　千頭が眠っていた
きみの額の　月影の広場で
そしてぼくは四夜も縄で縛っていた
雪の仇敵の　きみの腰を

漆喰とジャスミンのなかで　きみの視線は
種が生気を失った　細い枝だった
ぼくはきみに捧げるために　胸で探った
永遠に　という象牙の文字を

永遠に　永遠に　苦悩のぼくの庭
永遠にすり抜けていく　きみの体
ぼくの口にあふれる　きみの静脈の血
ぼくに捧げる灯も消えた　きみの唇

※　ガセーラはペルシアの詩形の一つ。詩連の数は十二を超えない。
恋愛や飲酒その他、人生の楽しみを主題にしたものが大半。

◆砂の果てた日

北原千代

一葉の写真を巡ってわたしたちは手紙を交わした
そのひとはもっとも愛する妻のことを
人差し指で砂に文字をかくようになんども愛しながら描写
　した
伊平屋島の瑠璃いろの海を背景に
島で生まれ育ったという妻にカメラを向けさせている
あらゆるものすべてを包む
天上の調べのようなあかるさ
と同時になにか忘れ物をした子どものように
こころもとなく何かいいたげにほどかれた口もと
それはわたしの覚えているいちばん好きな
たったひとつの表情だった

夢のごとくうつくしい瑠璃いろです
いつかあなたを連れていってあげましょう
出合うことのなかった何十年のあいだのできごとを

朝の散歩のようにわたしは返信した
繰り返す家族の食卓や旅の日のありさまをこっけいなほど
まじめにこの世の文法に従い
雲の動くのや水の流れる音などをとりとめなく語り
わたしたちは向かいあって座るふたりのように
砂山の砂をテーブルのうえに集めた
なだらかな丘をつくり
またやさしく指で崩して白砂にかえすのがその日
さようならの代りのあいさつ

浜辺の砂が尽きるまでなんども何千回も
あのなつかしい町で合うことにしましょう

伊平屋島の砂浜の砂が
てのひらからこぼれ落ちてしまった
わたしの睡っているあいだにそのひとを
火が焼いてしまった

一葉の写真だけがのこされた
ひとつぶの砂も握れなくなりましたと
なにか悪いことをした子どものように
瑠璃いろを背中に負うて
海

◆眠り続ける夢を見る

黒田ナオ

姫路城の石垣になりたいと思っていた
誰にも気づかれず
何十年も何百年も静かに
ずっとこの世を見ていたい

幾度もの戦があって
何人もの人たちの血が流れて
転がる侍たちの首と農民の悔し涙が
固まって固まって
姫路城の石垣となる
私もそこに混じって
ひとつの石ころとなり
この世を支えていたい

病院のベッドで動けない私が
なんの役にもたたず
ただ眠り続けるだけの私が
いつの間にか人生を懸けて
姫路城の石垣となり
世の中を支えていることなど誰も知りやしない
たとえ家族であったとしても
気づかない

夢の続きを
見ている

渦巻く強風にさらされながら
姫路城の上にひろがる
澄みきった青空を見上げて
じっとしている生きている
いつまでも
動かない

◆憑かれたわ〔関西弁のイントネーションで〕

北岡武司

カップ麺をたべようと薬缶で湯を沸かし
卓袱台のまえに座ったわ
昨日のカップ麺の殻がウチを睨みつけてる
暖房のない部屋に知りあいがくれた電気絨毯
　電気代がもったいないわ
背中に毛布を被り　ああさぶと震え眠っていた
娘の顔が笑う
　あの子　ここから大学に通えるのにねえ
交通事故に遭い入院している妹の顔
　あの子　これからは車椅子やねえ
玄関の呼び鈴を押す音

　ああ起きてますよ　いま行きます
さぶさに震え立ちあがり
玄関をあけるとビニール袋が飛んでいる
台所に戻れば薬缶のお湯がなくなりかけていた
　そうか　お父ちゃんが知らせてくれたんや
　お父ちゃんありがとう
仏壇に手をあわせ話す

お父ちゃん　あんたの孫　ウチのこと嫌いなんやろか
夜も眠らずパートで　あの子の授業料稼いでいるのに
あの子いうたらウチと会いたがらへんねん
おばちゃんが心病んでるから大学近くで暮らすわ
お願い　授業料だけだしてね
三年前そう言われてから会ったんは一回だけや

あの子　ほんまはウチのことが嫌いなんやろか
ウチ　ほんまに疲れたみたいやわ

◆みつまた

大橋愛由等

駆け抜ける。追われているわけではない。セルベッサ・ネグロを呑みすぎたのは事実だ。秋の空を見上げる。三の倍数の鳥たちが飛びかう。ムクノキにひそむ鳥はわたしに語りかけようとしない。今日の風向きがお気に召さないのだろう。ああ、渡り鳥たちはもう旅立っていったのだろうか。〈ぽから〉という地所へ。かれらの遺した片言をフランス窓をあけて窓辺に並べてみる。二〇本の手と足の指で数えてもたりない。〈わたしは疲れた。わたしは坐りたい。〉と語り遺しているのはパーリ語だった。往古がいまともにある。鳥たちの羽ばたきのなかで往古は繰り返される。

すべてはその時以降に造作された街からちは、ひとたちなのか。あるいはその時以前のひとたちなのか。気散じな風たちがなにを思ったのか、戻ってきて昨日の〈甚句〉を聴きたいと言ってきた。「昨日の唄はきみたちのように昨日の風だ」と追い返そうとしたが思いとどまって公園に彼らを呼び寄せ、ムクノキの樹下に立ち、葉群れたちに頼んでうたってもらった。美麗な唄だった。風たちはひゅうひゅうと葉群れを鳴らした。歓喜の口笛のつもりだろう。そうだ、きっと葉群れもまたひとたちの仲間なのだ。

〈甚句〉が聴こえてくる。歌っているひとた

電線で遮断された都会の空はかなしみを純化している。もうすぐ季節風の吹く方角が変転することをみな知っているけど、知らないふりをしてラヂオを聴いている。遠い海鳴りのさざめきを、昼過ぎのわたしが午睡しようとしている直前のニュースで伝えようとしているアナウンサーの鼻濁音は電線で遮断された都会の空のかなしみを想起させる。ムクノキはたしか鼻濁音が嫌いだったはずだ。しかも、鳥たちも樹木たちも彼らのかわたれ以降の友である蛾たちの飛行が減っていることを気づかないふりをしている。

◆シングルメリー

中堂けいこ

からかぜが吹くまえに濃い緑のものたちを家に上げる。蝙蝠蘭は羽根をひろげて鉢から飛び立とうとするし兵児羊歯は地面にはりついて動かない。いつのまにかカズンズの水彩画の部屋は熱帯雨林の様相で、くらいからくらいからと蝙蝠が飛びたち外に出られやしないと、カーテンの襞に隠れてしまうのだ。そのうちにすっかり忘れられて奴らはみんな木乃伊になるんよ、とメリー・レインは言うが、冬の窓のカーテンに百舌鳥の忘れた蛙のなごりも雨林額には背景にすぎない。ココナツ椰子、蓬莱羊歯、空気草、細葉榕、縄草、伝手羊歯、彼らは単体でなければいけない。一つの鉢に一つの草。霜月の深夜、光合成を止めた彼らを家のあちこちに配置していく。居間や食堂、寝室も洗面所も便所もくまなく隙間なく置いていく。鉢の合間は細い道になり、天井はやがて八重葎の密生になるだろう。息をひそめていた虫たちが蠢く。メリーの部屋に冬眠はないのだと彼らの熱帯は赤い布と白い布を広げて冬を祝う。

◆ごちゃくごちゃく

高谷和幸

ひとが鉄橋をとおりすぎたのを覚えておられるのは可能だろうか。川面にＮＥＯＮが光のあごをふるわせていた。二つの鉄橋にはさまれて、駅の名は「ごちゃく」。アナウンスの喉から出された二重らせんの文字。「(ご)(ちゃ)(く)」「(ご)(ちゃ)(く)」。「あちら」と示されることになったひとの「あなたのごちゃく」は、わたしたちが一緒に過ごした国の「わたしたちのごちゃく」で聞き取ることができないことが「こちらのごちゃく」だとすれば、鉄橋にあるここには「ごちゃく」がない。それは「あなたのごちゃく」がないことのあり方で水の上を流れていた。「ごちゃく」は水面を歩きながら水面から飛べないとりかもしれない。いや、むしろ約束を水中にくぐらせてみかたとしての年 月を待っている(人間のごちゃく)。わたしではない「ごちゃく」がわたしにとってＮＥＯＮの光でないはずがない。水没した文字のように、「く」の字の細い首を突き出して。「(ご)(ちゃ)(く)」、あまかわをすぐわたることになるだれかの鉤。

ごちゃくごちゃく

◆夏に出あう

福田知子

どこのどんな河原だったのか
草の道路から降りていく
熱く湿った石ころ
みみずが小さく影を曳いて
死者たちを導いていく
雨の日の精霊流し
八月は多くの死者たちが出会う
多くの生きているものたちが別れていく

透明なセロファンにくるまれたやり場のない記憶
客人の前で並べ替えた水色のゼリーは死んだ
祖母に叱られたかなしい思い出
わすれない　なぜ叱られたのか　わからないまま
水の上を流れるアマガエル　ヒキガエル　ウシガエル
プラスチックの五色の人工の池に破裂した
内臓を残さないまま死んだかれらみたいに
夏はまた
死んだ記憶とも出あいなおす

幽玄の霧の中を
白い印につきながらすすむ　水辺の
橋を渡って少女漫画を橋の向こうの町に　ぞろぞろ
買いに行くシュミーズ姿の少女たち
あるいはゴム草履に麦わら帽子
バスに乗り　行ったことのない
聞いたことのない町に出かける午前の緊張
走るバス　窓からの強い風を受けながら　ぐんぐん
砂丘の町にたどり着く
ゴム草履を焦がす焼けた砂
ラクダたちは遠い目をした大人たちを乗せて
長いまつげをしばたいた　いっしゅん
ゆるやかにかすれゆく

夏の終わりの記憶とともに死者たちの蘇り
静かな汗となる

うなだれた薔薇の先にちいさな赤い花を見つけた朝
幾人かの親しい死者たちの歓びの歌声が届くような気がして
いつかは消えるいのちのあわいに結ぶ
かすかな水滴をとおしてつながっていく
ささやかないのちのわたくしたち

神戸詞（うた）あしび

106-2016.10.30 大橋愛由等

フラメンコはただならぬ世界の表出

踊る当事者でもないぼくが、フラメンコをどれだけ語れるのか不安を抱きながら書きはじめることにしよう。

毎週土曜日、フラメンコの現場にいる。演奏者の立場ではなく、興業する側として。つまりフラメンコを踊るタブラオ（ライブハウス）の主（ぬし）として年間五五回ほどのライブに接している。その現場は、カルメンというスペイン料理レストランではあるが、土曜日にはフラメンコライブを開催している（日曜日、祝日にすることもある）。

毎週出演するグループが異なる。もちろんレギュラー組は存在する（第一、第四土曜日は毎月決まって同じグループが出演するなど）。そうなると週ごとに特色が出てくる。群舞が得意なグループであったり、ソロでぐいぐい最初から最後まで押しまくるグループだったり。

フラメンコを担う演奏者のうち、その人口が多いのはバイレ（ダンサー）である。ライブを行う時はそのバイレたちが、一回ごとにカンテ（歌うひと）、ギタリスタと契約することになる（フラメンコはバイレ、カンテ、ギターラの三者一体となった芸能である）。バイレはフラメンコ教室に通う初級・中級者も含まれるが、カンテ、ギタリスタはプロのひとたちがほとんどなのである。カルメンにやってくるメンバーは同じようなひとたちが巡回のように出演する。いわば関西フラメンコ村の村民といったらいだろうか（東京のタブラオはその店ごとにギターラとカンテが決まっていてバイレが交代するところもあるそうだ）。

遠藤佳代のフラメンコ

その関西フラメンコ村の村民たちにはいくつかの特色がある。とくにカンテは女性の唄い手（カンタォーラ）が最近多くなっている。ふと数えてみただけでも、井上恵理、田村めぐみ、鳥居貴子、中山えみ子、中武香、西田祐加、松林由美らの名前が浮かぶ。いずれも「フラメンコな声」を出してライブを盛り上げている。この人たちが今後もますます舞台の数をかさねて熟達していくことが楽しみである。

楽しみといえば、レギュラー組のなかで、ある時急に上達するバイレを見出すことがある。それはある時の舞台から突然そのバイレに変化があらわれ、その舞台から一回踊るごとになにかに憑かれたように上達するのが約一年間ほどつづく。つまり決められたコンパス（拍子）どおりに踊っていたバイレが、そのコンパスに踊らされた段階から一歩抜け出て、カンテやギターラを引き込む鬼神のような踊りを見せるのである。バイレからはオーラが漂い、フラメンコを初めてみたひともそのバイレの踊りになにかを感じ、圧倒される。

フラメンコにはいくつかの曲想というのがあり、ぼくは「ソレア」とか「シギリージャ」といった〝かなしみ〟を表現するタイプの曲を好む（反対に明るいトーンの「アレグレアス」を得意とするバイレもいる）。なにしろフラメンコは一曲踊りきるのに一〇分程度かかる。一曲踊ったあとは息が切れるし、見ている側もその熱気で熱くなる。すぐれたバイレの踊りには〝かなしみ〟を表現する曲にふとその正反対な表情をその踊りのながに見出すことができる。また逆に「アレグレアス」の踊りに〝悦び〟の真逆な感情を読み取ることがある。バイレは全身全霊でその曲想を表現する、その底知れない魅力と怖さ――　スペイン・アンダルシアという極西で生まれたフラメンコが極東の日本人の魂を揺さぶるのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.117
神戸

2016年10月30日　通巻117号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税込)